現代家族における子どもの対人関係

水田善之*　　田中理絵

Interpersonal Relations of the Children in Contemporary Family

Yoshiyuki MIZUTA　　Rie TANAKA

(Received September 26, 2003)

1. 本論文の目的

本論文の目的は、家族環境が子どもの対人関係や自己認識にどのような影響を与えるのかについて明らかにすることである。

子どもは、児童期から青年期にかけて準拠集団を家族集団から仲間集団へと移行していく。この仲間集団への準拠集団の移行をスムーズに行うためには、人間関係の基礎である家族との対人関係がうまくいっている必要があると思われる。家族内で良好な人間関係を持っている子どもは、その関係を基盤にして家族集団から出たときにも、友人や社会との関係において、徐々に居場所を見つけ、それぞれとの関係で良好な対人関係を築くことができ、より高い満足度を得ようとしていく。また「家族」とは、子どもの基礎的な社会化を担う社会化の機関(agent of socialization) であり、その重要性についてもこれまで再三にわたって指摘されているし、事実重要なものであると言えるだろう。しかし、重要であるということはわかっていても、現代の家族には様々な様態や人間関係があり、今日家族について個人化、崩壊、虐待の増加、離婚の増加、規模の縮小化等について社会的な問題として論じられることが多い。そこで本論文では、家族が子どもの対人関係および子どもの自己認識に対して及ぼす影響を実証的に明らかにすることで、子どもの発達における現代家族の重要性について考察を試みたい。

2. 分析の枠組

そこで本稿では、家族環境の違いに着目する。なかでも特に、子どもの家族環境を分析するための枠組を「親からの理解度の高低」と「両親の仲の良し悪し」との二軸に設定することとした。子どもが両親に理解してもらえていると思っている度合いが強ければ、親子関係がうまくいっているであろうから「親からの理解度の高い」子どもほど家族内に自分の居場所を見つけていると言えるであろう。また両親の仲の良し悪しは、あたたかさといった家族内の雰囲気を表していると考えることができる。総務庁などにおける調査[1] を参考にしてみても、この二つの軸が子どもにとっての家族環境を見るうえで意味のあるものであることが分かる。そこで具体的には、この二軸を交差することで子どもにとっての家族環境を４つの象限に分け（図１)、その４タイプの家族環境別に子どもたちの対人関係の様態や自己認識にどのような差異があるのかについて明らかにして、前述の課題について考察を試みることとした[2]。

＊山口大学大学院教育学研究科

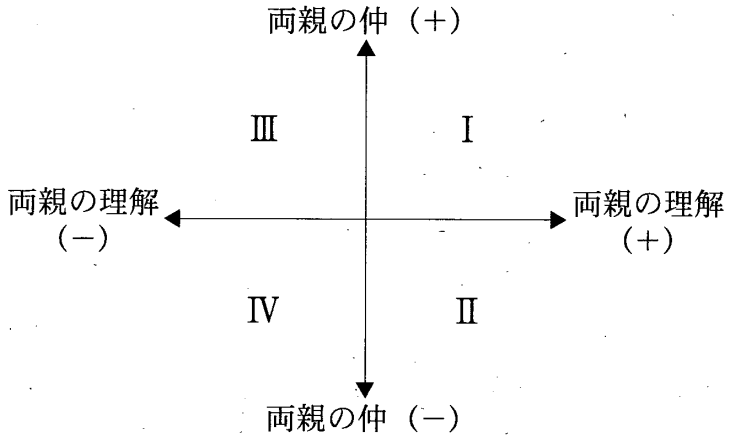

図１　家族環境のタイプの分析枠組

ここでいう「両親の理解度」は、質問紙調査において、「あなたのことをどれくらい分かってくれていると思いますか」という質問を父親と母親別に尋ね、「とてもよく分かってくれる」「だいたい分かってくれる」「あまり分かってくれない」「ぜんぜん分かってくれない」の四段階で選択してもらう方法をとった。これをまず「分かってくれる」「分かってくれない」の二段階に統合して、その後に父親と母親の答えを統合した。このとき、両者ともに「分かってくれない」というのを「理解してくれていない」とし、両者もしくは片方だけでも「分かってくれている」というものは「理解してくれている」とした。また、「両親の仲の良し悪し」は、「あなたのお母さんとお父さんは仲がいいですか」と質問し、「とても仲がよい」「あまり仲がよくない」という選択肢で答えてもらいタイプ分けしたものである。

3. 調査概要

本研究の分析において使用するデータは、2003年１月から３月にかけて首都圏・山口県・福岡県（都市部・農村部・工業地域）の小学校（15校）、中学校（６校）において小学校４年生・６年生・中学校２年生を対象に実施した「子どもの生活調査」をもとにしている[3)]。この調査では、様々な場面における対人関係の様子や自己認識について、さらに家族構成などについて質問を行った。留置調査法でサンプル数は907。その内訳については表１に示すとおりである。

表１　サンプル構成　　人数（％）

	都市部	農村部	工業地域	計	回収率（％）
小学校４年生	142（41.2）	81（23.5）	122（35.3）	345（100.0）	93.5
小学校６年生	106（37.2）	82（28.8）	97（34.0）	285（100.0）	96.6
中学校２年生	108（39.0）	85（30.7）	84（30.3）	277（100.0）	81.2
計	356（39.3）	248（27.3）	303（33.4）	907（100.0）	90.2

4. 分　析

（1）

まず最初に、子どもの一般的な対人関係の様態とコミュニケーションの状況について見ておこう。

表２のように、子どもが「よく話をする」相手は、子どもの年齢が上がるにつれて両親やきょうだいといった家族の割合が減少するが、友人や教師についてはそれほど大きな差異は見られない。しかし、「話す量に満足している」「話す内容に満足している」といった「コミュニケーションの満足度」や「よくわかってくれている」という「他者からの理解度」については、子どもを取り巻く対人関係全般において低下している。

表３は、さまざまな日常生活場面における対人関係のネットワークの規模について聞いたものである[4)]。どの状況においても、全般的に学年が上がるにつれて縮小している傾向にあるということを見てとることができる。

次に、さまざまな日常生活場面を想定して、その状況ごとに「いちばん話をしたい」「いちばん自分を分かってくれる」といった他者を選択してもらった（表４）。「楽しいとき」といった〈平素〉の場面では、学年が上がるにつれて友人志向が非常に強くなる。また、「イライラ

表２：子どもの対人関係とコミュニケーション状況（学年別）　（はい：％）

		全　体	小学４年生	小学６年生	中学２年生	
よく話をする	お父さん	53.6	62.5	49.2	46.2	＊＊
	お母さん	85.5	90.3	86.6	78.1	＊＊
	きょうだい	75.5	79.7	76.1	69.9	
	先　生	28.4	32.3	24.7	27.2	
	友だち	91.5	93.3	91.2	89.5	
話す量にとても満足している	お父さん	38.5	45.8	30.3	37.5	＊＊
	お母さん	56.1	64.6	54.2	47.0	＊＊
	きょうだい	50.0	53.4	47.9	48.0	＊
	先　生	28.7	31.4	27.8	26.4	
	友だち	61.8	74.4	61.8	46.0	＊＊
話す内容にとても満足している	お父さん	38.9	49.8	34.5	28.7	＊＊
	お母さん	47.9	60.2	44.6	35.3	＊＊
	きょうだい	46.0	51.1	47.5	38.2	＊＊
	先　生	30.5	38.6	27.7	23.4	＊＊
	友だち	64.6	74.2	65.6	51.4	＊＊
よくわかってくれている	お父さん	37.6	50.3	35.0	23.5	＊＊
	お母さん	52.9	63.5	52.2	40.2	＊＊
	きょうだい	26.5	28.1	30.2	20.8	＊＊
	先　生	18.1	31.3	13.8	6.0	＊＊
	友だち	36.9	47.5	35.0	25.5	＊＊

（注）＊ p<.05　＊＊ p<.01　以下同様

表３：状況における対人関係の規模　　(%)

		いない	1～2つ	3～4つ	5～6つ	全て	N
楽しいときの話し相手 ＊＊	小学４年	1.7	2.6	33.9	40.3	21.5	345
	小学６年	1.4	10.9	46.1	26.4	15.2	284
	中学２年	1.4	15.6	42.8	30.1	10.1	276
	全体	1.6	9.2	40.4	32.8	16.0	905
イライラしたときの相談相手 ＊＊	小学４年	18.3	29.9	39.1	9.8	2.9	345
	小学６年	14.0	35.8	40.3	8.1	1.8	285
	中学２年	27.5	26.5	41.7	3.6	0.7	276
	全体	19.8	30.7	40.2	7.4	1.9	906
悲しいときの話し相手 ＊＊	小学４年	11.9	20.6	40.6	21.4	5.5	345
	小学６年	15.4	23.9	44.2	14.4	2.1	285
	中学２年	20.7	27.2	42.0	7.6	2.5	276
	全体	15.7	23.6	42.2	15.0	3.5	906
少し困ったときの話し相手 ＊＊	小学４年	5.8	16.8	51.6	22.6	3.2	345
	小学６年	4.2	23.2	53.7	18.2	0.7	285
	中学２年	11.2	30.4	49.7	8.7	—	276
	全体	7.0	23.0	51.6	17.0	1.4	906
とても困ったときの話し相手 ＊＊	小学４年	9.6	23.8	43.4	20.3	2.9	345
	小学６年	11.9	28.1	43.1	15.8	1.1	285
	中学２年	19.6	25.4	49.2	4.0	1.8	276
	全体	13.4	25.6	45.1	13.9	2.0	906
一緒にいて落ち着く人 ＊＊	小学４年	1.4	6.1	27.8	35.4	29.3	345
	小学６年	1.4	7.4	29.8	37.9	23.5	285
	中学２年	4.0	12.3	33.7	38.0	12.0	276
	全体	2.2	8.4	30.2	37.0	22.2	906
自分のことをわかってくれる人 ＊＊	小学４年	1.2	3.5	26.6	32.8	35.9	345
	小学６年	3.2	6.3	27.7	33.7	29.1	285
	中学２年	6.2	10.5	35.5	32.2	15.6	276
	全体	3.3	6.5	29.7	32.9	27.6	906

（注）計の数値は実数。　すべて100％
以下同様

したとき」「悲しいとき」「困ったとき」といった＜困難＞に陥った場面でも、年齢が上がるにつれて家族の割合よりも友人の割合が大きくなり、準拠集団が移行する様子がうかがえる。ところが、「自分を分かってくれる」「一番心配してくれる」といった、必ずしも会話を必要としない＜心の支え＞となるような対人関係については、家族の割合がいずれの学年においても非常に高く、友人関係に逆転されることはない。

表４を概観すると、＜平素＞＜困難＞＜心の支え＞といったさまざまな場面を想定したとき、子どもはその状況に応じた他者選択を行っており、重層的な対人関係を使い分けている様子がうかがえる。また、どの場面でも「家族と友だち」が重要な他者として選択されているこ

表４：状況における対人選択（学年別）　（%）

		家族	先生	友だち	その他	計
楽しいとき一番話したい人 ＊＊	小学４年	40.5	2.3	56.3	0.9	343
	小学６年	29.2	1.4	67.6	1.8	281
	中学２年	16.3	1.5	80.0	2.2	270
	全体	29.6	1.8	67.0	1.6	894
イライラしたとき一番話したい人 ＊＊	小学４年	52.8	4.8	28.5	13.9	330
	小学６年	40.5	1.9	47.9	9.7	269
	中学２年	32.4	3.1	53.7	10.8	259
	全体	42.8	3.4	42.1	11.7	858
悲しいとき一番話したい人 ＊＊	小学４年	59.2	4.3	26.4	10.1	326
	小学６年	46.5	2.6	42.3	8.6	267
	中学２年	32.6	2.7	57.0	7.7	258
	全体	47.1	3.3	40.7	8.9	851
少し困ったとき一番話したい人 ＊＊	小学４年	47.2	15.2	33.4	4.2	335
	小学６年	44.0	4.4	48.0	3.6	275
	中学２年	33.8	7.1	55.4	3.7	269
	全体	42.1	9.3	44.7	3.9	879
とても困ったとき一番話したい人 ＊＊	小学４年	55.4	15.8	23.2	5.6	336
	小学６年	50.2	9.1	35.2	5.5	273
	中学２年	42.8	7.2	47.3	2.7	264
	全体	49.9	11.1	34.3	4.7	873
一緒にいて一番ホッとする人 ＊＊	小学４年	53.6	2.4	35.7	8.3	336
	小学６年	44.8	3.2	44.4	7.6	227
	中学２年	39.3	1.1	52.1	7.5	265
	全体	46.5	2.3	43.4	7.8	878
自分を一番わかってくれる人 ＊＊	小学４年	69.1	3.0	19.9	8.0	337
	小学６年	70.6	3.7	21.3	4.4	272
	中学２年	62.6	1.1	32.1	4.2	262
	全体	67.6	2.6	24.0	5.8	871
自分を一番心配してくれる人	小学４年	81.1	2.4	10.3	6.2	339
	小学６年	81.4	2.2	10.2	6.2	274
	中学２年	82.0	1.1	12.0	4.9	266
	全体	81.5	1.9	10.8	5.8	879

とが分かるが本論文においては、そのなかでも「家族」に注目することにした。

分析枠組において設定した二軸について、子どもの対人関係を見てみると（表5，表6）、家族との関係においてはどの項目においてもその有意差がはっきりと出ており、コミュニケーションの量や満足度が高い子どもほど、両親から理解されていると感じており、かつ、両親の仲が良いと言っている。このことからも「親からの理解度」「両親の仲のよさ」というこの二

表５：子どもの対人関係とコミュニケーション状況（両親の理解）　　（はい：％）

		全　体	理解してる	理解してない	
よく話をする	お父さん	53.7	56.9	32.7	＊＊
	お母さん	86.4	90.0	62.6	＊＊
	きょうだい	76.3	78.4	62.2	＊＊
	先　生	28.4	29.5	21.0	
	友だち	91.9	92.3	88.9	
話す量にとても満足している	お父さん	38.7	39.6	32.7	＊
	お母さん	57.4	60.4	37.4	＊＊
	きょうだい	50.4	52.1	39.4	＊＊
	先　生	29.2	29.2	29.2	＊＊
	友だち	62.3	63.5	54.6	
話す内容にとても満足している	お父さん	39.1	42.7	15.9	＊＊
	お母さん	48.9	54.2	14.0	＊＊
	きょうだい	46.2	48.6	30.3	＊＊
	先　生	30.7	32.5	18.5	＊＊
	友だち	64.7	67.2	48.1	＊＊
よくわかってくれている	お父さん	37.9	43.7	—	＊＊
	お母さん	53.9	62.1	—	＊＊
	きょうだい	26.9	29.4	10.1	＊＊
	先　生	18.4	20.4	4.8	＊＊
	友だち	37.3	40.3	17.6	＊＊

表６：子どもの対人関係とコミュニケーション状況（両親の仲）　　（はい：％）

		全　体	仲が良い	仲が良くない	
よく話をする	お父さん	53.1	59.6	35.2	＊＊
	お母さん	85.6	90.3	73.1	＊＊
	きょうだい	75.5	79.1	65.7	＊＊
	先　生	29.3	29.5	28.6	
	友だち	91.6	91.7	91.5	
話す量にとても満足している	お父さん	38.6	40.5	33.6	＊＊
	お母さん	57.3	61.7	45.6	＊＊
	きょうだい	50.7	53.9	41.7	＊＊
	先　生	28.4	30.6	22.5	＊
	友だち	62.6	65.6	54.7	＊
話す内容にとても満足している	お父さん	38.7	42.4	28.6	＊＊
	お母さん	48.1	53.0	35.2	＊＊
	きょうだい	45.4	50.1	32.5	＊＊
	先　生	30.8	32.7	25.8	
	友だち	65.1	68.2	57.0	＊
よくわかってくれている	お父さん	38.1	45.8	16.9	＊＊
	お母さん	54.0	61.3	34.7	＊＊
	きょうだい	27.3	29.4	21.6	＊＊
	先　生	18.9	19.5	17.3	＊＊
	友だち	37.7	39.0	34.2	＊＊

つは子どものコミュニケーションや対人関係の様態に影響をもっており、家族環境の状態を見るのに相応しいものだと言える。

（2）

二軸を交差して４象限に類型化していくことにする。なお、Ⅰ～Ⅳの各象限の内訳は表7,表８のとおりであるが[5]、「親から理解されており、両親の仲も良い」という第Ⅰ象限の子どもが全体の67.3％と最も多いのが特徴的である。

表７：学年×対人関係タイプ（類型別）　（％）

対人タイプ	Ⅰ 両親理解がある 両親仲が良い	Ⅱ 両親理解がある 両親仲が良くない	Ⅲ 両親理解がない 両親仲が良い	Ⅳ 両親理解がない 両親仲が良くない	N
小学４年	72.9	20.9	2.5	3.7	321
小学６年	71.2	14.6	6.9	7.3	247
中学２年	54.2	23.4	10.3	12.1	214
全　体	67.2	19.6	6.0	7.2	782

$p < .01$

表８：地域×対人関係タイプ（類型別）　（％）

対人タイプ	Ⅰ 両親理解がある 両親仲が良い	Ⅱ 両親理解がある 両親仲が良くない	Ⅲ 両親理解がない 両親仲が良い	Ⅳ 両親理解がない 両親仲が良くない	N
農　村	59.4	24.1	7.5	9.0	199
工　業	72.9	15.3	5.7	6.1	261
都市部	67.7	20.2	5.3	6.8	322
全　体	67.2	19.6	6.0	7.2	782

類型化した後に改めてさまざまな状況での対人選択を見てみると、表９のような結果になる。第Ⅰ象限（両親の理解がある×両親の仲が良好）と第Ⅱ象限（両親の理解がある×両親の仲は不良）の子どもはどの状況においても「家族」の数値が極端に低くなることはなく、類似した傾向を示している。それに対して第Ⅳ象限（両親の理解はない×両親の仲は不良）ではどの項目においても「家族」の数値が極端に低く、その分「友だち」や「その他」の数値が高くなっている[6]。第Ⅲ象限（両親の理解はない×両親の仲は良好）は数値的にはそれらの中間を示しているが、傾向としては第Ⅳ象限に類似していると言える。

ところで特にここで注目したいのは、「一緒にいてホッとする」「自分を分かってくれる」「自分を心配してくれる」といった＜心の支え＞となる項目において第Ⅲ、Ⅳ象限の数値が低い点である。そのなかでも「自分を心配してくれる」という項目は類型化前ではどの学年においても80％以上の子どもが家族を選択していたのに、類型化後の結果では第Ⅲ、Ⅳ象限の子どもたちのなかで家族を選択したのは59.5%、44.0％と低い。このことから、子どもの対人関係においては、いくら「家族内の雰囲気」が良くても「自分に対する両親の理解」がなければ＜心の支え＞として意味はなく、「自分に対する両親の理解」が重要であるということがうかがえる。

次に表９の「先生」の項目に注目してみると、全体的に〈平素〉〈困難〉〈心の支え〉といっ

表９：状況における対人選択（類型別）　（%）

	対人タイプ	家族	先生	友だち	その他	N
楽しいとき一番話したい人 ＊＊	Ⅰ	35.7	1.4	62.1	0.8	518
	Ⅱ	30.3	3.9	64.5	1.3	152
	Ⅲ	9.1	2.3	86.3	2.3	44
	Ⅳ	8.9	1.8	80.4	8.9	56
	全体	31.2	1.9	65.3	1.6	770
イライラしたとき一番話したい人 ＊＊	Ⅰ	49.7	3.4	37.0	9.9	497
	Ⅱ	42.3	4.7	40.3	12.7	149
	Ⅲ	20.9	4.7	53.5	20.9	43
	Ⅳ	16.3	2.0	57.1	24.6	49
	全体	44.3	3.7	40.0	12.0	738
悲しいとき一番話したい人 ＊＊	Ⅰ	57.2	2.8	32.9	7.1	495
	Ⅱ	39.6	2.1	47.2	11.1	144
	Ⅲ	28.6	2.4	52.4	16.6	42
	Ⅳ	16.0	10.0	56.0	18.0	50
	全体	49.3	3.1	38.4	9.2	731
少し困ったとき一番話したい人 ＊＊	Ⅰ	48.0	10.2	39.8	2.0	512
	Ⅱ	40.0	10.7	44.7	4.6	150
	Ⅲ	34.1	6.8	52.3	6.8	44
	Ⅳ	15.7	7.8	56.9	19.6	51
	全体	43.5	9.9	42.6	4.0	757
とても困ったとき一番話したい人 ＊＊	Ⅰ	53.3	12.6	30.6	3.5	507
	Ⅱ	56.3	8.6	29.8	5.3	151
	Ⅲ	32.6	9.3	51.1	7.0	43
	Ⅳ	15.7	15.7	52.9	15.7	51
	全体	50.2	11.8	33.1	4.9	752
一緒にいて一番ホッとする人 ＊＊	Ⅰ	52.7	1.6	39.2	6.5	510
	Ⅱ	44.0	4.0	43.3	8.7	150
	Ⅲ	16.3	4.7	60.5	18.5	43
	Ⅳ	14.8	3.7	61.1	20.4	54
	全体	46.2	2.4	42.8	8.6	757
自分を一番わかってくれる人 ＊＊	Ⅰ	76.7	3.0	16.4	3.9	507
	Ⅱ	66.0	2.0	26.0	6.0	150
	Ⅲ	38.1	—	50.0	11.9	42
	Ⅳ	19.2	3.8	55.8	21.2	52
	全体	68.4	2.7	22.9	6.0	751
自分を一番心配してくれる人 ＊＊	Ⅰ	86.6	2.3	7.4	3.7	515
	Ⅱ	83.4	0.7	10.6	5.3	151
	Ⅲ	59.5	—	28.6	11.9	42
	Ⅳ	44.0	2.0	34.0	20.0	50
	全体	81.8	1.8	10.9	5.5	758

（注）Ⅰ＝理解していて仲も良い　Ⅱ＝理解はしている　Ⅲ＝仲は良い　Ⅳ＝理解せず仲も良くない　以下同様

たいずれのどの状況においても数値は低く、またⅠ～Ⅳのタイプによる違いはあまり見受けられない。しかし、困難時においては、その問題の難易度の大小に関係なく数値が若干高くなっている。ここから、困難時にこそ教師は子どもにとって必要とされており、そのときに気付いてあげられることが大切であると言えるのではないだろうか。

表10は場面ごとにおける対人関係の規模を示すものである。いずれの場面においても、その規模が大きいのは第Ⅰ象限の子どもであって、逆に規模が小さいのは第Ⅲ・Ⅳ象限の子どもである。ここで一つ注目したいのは、多くの場面において第Ⅲ象限の方が、第Ⅳ象限よりも対人

表10：状況ごとにおける対人関係の規模（類型別）　（%）

		いない	1～2つ	3～4つ	5～6つ	全て	N
楽しいときの話し相手 ＊＊	Ⅰ	1.3	6.3	32.2	38.5	21.7	525
	Ⅱ	—	6.5	41.2	37.3	15.0	153
	Ⅲ	4.2	27.7	34.0	27.7	6.4	47
	Ⅳ	8.9	30.4	46.4	10.7	3.6	56
	全体	1.8	9.3	35.1	35.6	18.2	781
イライラしたときの話し相手 ＊＊	Ⅰ	19.3	33.5	33.5	10.8	2.9	526
	Ⅱ	19.6	32.0	43.1	3.9	1.4	153
	Ⅲ	40.4	36.2	21.3	2.1	—	47
	Ⅳ	33.9	28.6	37.5	—	—	56
	全体	21.7	33.0	34.9	8.2	2.2	782
悲しいときの話し相手 ＊＊	Ⅰ	14.3	23.8	36.5	20.3	5.1	526
	Ⅱ	11.8	27.5	43.0	14.4	3.3	153
	Ⅲ	44.7	29.8	19.1	6.4	—	47
	Ⅳ	32.1	25.0	42.9	—	—	56
	全体	16.9	24.9	37.2	16.9	4.1	782
少し困ったときの話し相手 ＊＊	Ⅰ	6.3	21.5	47.1	22.6	2.5	526
	Ⅱ	3.3	24.8	52.9	19.0	—	153
	Ⅲ	12.8	55.2	27.7	4.3	—	47
	Ⅳ	28.6	28.6	41.0	1.8	—	56
	全体	7.7	24.6	46.7	19.3	1.7	782
とても困ったときの話し相手 ＊＊	Ⅰ	10.6	26.6	40.3	19.5	3.0	526
	Ⅱ	12.4	26.1	47.1	13.1	1.3	153
	Ⅲ	31.9	48.9	17.1	2.1	—	47
	Ⅳ	35.7	26.8	35.7	1.8	—	56
	全体	14.1	27.9	39.8	15.9	2.3	782
一緒にいて落ち着く人 ＊＊	Ⅰ	1.1	5.9	19.2	41.3	32.5	526
	Ⅱ	2.0	7.8	28.8	46.4	15.0	153
	Ⅲ	10.6	27.7	23.4	34.0	4.3	47
	Ⅳ	10.7	23.2	51.8	14.3	—	56
	全体	2.6	8.8	23.7	39.8	25.1	782
わかってくれる人 ＊＊	Ⅰ	—	2.7	18.6	38.6	40.1	526
	Ⅱ	—	3.3	26.8	49.6	20.3	153
	Ⅲ	21.3	46.7	27.7	4.3	—	47
	Ⅳ	33.9	28.6	33.9	3.6	—	56
	全体	3.7	7.2	22.0	36.2	30.9	782

関係の規模が小さい点である。これは第Ⅳ象限の子どもは両親理解もなく両親仲も良くないため家族に居場所がなく、他の対人ネットワークを求めて規模を広げているのに対して、第Ⅲ象限の子どもは中途半端な状態なために対人ネットワークの規模を広げることができていないということなのだろうか。

しかし、表11や表12を見てみると、第Ⅳ象限の子どもが家族以外での対人関係が必ずしもうまくいっているというわけではなく、逆に第Ⅲ象限の子どもの方が家族以外の学校においての生活でも友だちとの関係がうまくいっていることがわかる。

それでは第Ⅳ象限の子どもの友だちとの関係はどうかを見てみると、友だちとの関わりが大きい、学校において落ち着くと答えた子どもは他のどの象限の子どもと比べても少なかった。そして、一人でいた方が落ち着くと答えた子どもはどの象限よりも数値が高いという結果になった。また、表12は友人関係について聞いたものであるが、これにおいても「友だちがたくさんいる」「今の友だち付き合いに満足している」「友だちに何でも話してもらえている」といった友人関係の良好さを示す項目では、第Ⅳ象限の子どもよりも第Ⅲ象限の子どもの方が肯定度が高く、反対に「親友と呼べる友だちがいない」「友だち付き合いが面倒に感じることがある」といったネガティブな友人関係を示す割合は、第Ⅳ象限の子どもの方が高いという結果が示された。つまり、第Ⅳ象限の子どもは家族環境が良くないためにその他の場所に居場所を求めてネットワークを広げようとするが、その他の環境においても浅い関係しか築くことができず、不安や不満を抱えた状態であるということがわかる。それに比べて第Ⅲ象限の子どもは対人関係の規模は広くなくても、その一つひとつとの関係はそれなりに深いのであろう。特に友人関係は、表12を見てみると、第Ⅰ象限や第Ⅱ象限の子どもと大差がない。このことは、家族環境において雰囲気だけでも良い環境にいると家族を自分の居場所と捉えることができ、その他の人たちとの対人関係においても不安や不満といったものが軽減されるということを表していると考えられる。

表11：落ち着く場所（居場所）　　（はい：％）

	全体	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	
家で家族と一緒にいるとき	90.4	96.6	89.5	67.4	53.6	＊＊
家でひとりでいるとき	61.1	57.9	62.1	71.7	80.4	＊＊
学校にいるとき	62.0	64.4	63.4	52.2	44.6	＊

表12：友人関係の態度と対人関係タイプ　　（はい：％）

	全体	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	
友だちがたくさんいる	47.5	50.6	45.4	42.6	28.3	＊＊
今の友だち付き合いに満足している	82.4	86.5	79.7	73.3	58.2	＊＊
友だちに何でも話してもらえている	46.6	48.0	50.3	37.8	30.4	＊
遊んだりおしゃべりは気の合う人とだけだ	39.7	37.7	41.2	37.0	57.1	＊
気の合わない人と無理に仲良くしない	63.0	61.0	65.4	65.2	73.2	
親友と呼べる友だちがいない	4.9	3.3	5.2	8.7	16.1	＊
友だち付き合いが面倒に感じることがある	13.3	9.8	15.7	23.9	30.9	＊＊

次に各タイプごとの最後に父母の役割についてを見ておこう。表13は、「もし、お父さんやお母さんがいなくなったら何が困りますか」と質問したものである。父親の場合、最も顕著な特徴は「お金」と「家族を守る人」にでている。家族環境が整っている子どもほど、父親の役割を「家族を守る」大黒柱としてみたり、「愛情」をくれる人としてみたり、精神的な面に重点をおいている。それに対して、家族環境の整っていない子どもは、父親にそうした精神面での役割は求めず、ただ「お金」を稼いでくる人、もしくは、いなくても別に「困らない」という考えが多くを占めている。また、母親の場合はいずれの象限においても「家事」の比率が高いが、顕著な特徴としてあらわれているのは「愛情」面であろう。家族環境が整っていない子どもは「愛情」よりも「家事」「お金」に母親の役割を見ているという結果であった。

表13：類型別にみた父母の役割　(%)

		お金	愛情	家事	しつけ	家族を守る人	相談相手	遊び相手	尊敬する人	困らない	その他	N
父**	Ⅰ	21.2	14.0	0.4	6.0	41.2	2.1	3.8	9.2	0.4	1.7	520
	Ⅱ	25.8	13.9	4.0	4.6	27.8	2.0	4.6	6.0	5.3	6.0	151
	Ⅲ	44.6	2.1	—	4.3	23.4	—	2.1	12.8	4.3	6.4	47
	Ⅳ	53.7	5.6	—	—	9.2	1.9	9.2	5.6	7.4	7.4	54
	全体	25.9	12.7	1.0	5.2	35.2	1.9	4.3	8.5	2.1	3.2	772
母**	Ⅰ	1.9	35.3	41.0	5.8	5.6	5.0	0.6	4.0	—	0.8	519
	Ⅱ	3.3	37.1	37.8	5.3	4.0	6.6	—	3.3	—	2.6	151
	Ⅲ	8.5	21.3	46.8	—	12.8	6.4	—	—	2.1	2.1	47
	Ⅳ	12.5	14.3	51.7	5.4	—	1.8	—	3.6	—	10.7	56
	全体	3.4	33.2	41.6	5.3	5.3	5.2	0.4	3.6	0.1	1.9	773

(3)

最後に、4類型別に、家族環境が自己認識にどのような影響を与えているのかについて見ていくことにする。表14は、他者とのコミュニケーション場面において望ましいと考えられる項目を設定し、それを肯定した子どもの割合をまとめたものである[7]。すべての項目で、第Ⅳ象限の子どもに低い数値が示された。その他の第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ象限はほぼ近い数値を示しており、あまり差がない。ここから、家族を対人関係の基礎にすることができている子どもは、自己認

表14：家族環境と自己認識　(はい：%)

	全体	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	
明るい性格だ	75.7	77.7	73.2	78.7	60.7	*
誰とでもすぐに仲良くなれる	73.6	75.3	73.0	76.6	57.1	*
一人よりも多くでいるほうが好きだ	71.7	75.7	65.8	72.3	50.0	**
困っている人がいたら助ける	65.3	67.7	66.2	67.4	38.2	**
いつも人のことを考えて行動する	49.2	53.1	43.1	44.7	33.3	*
頼りにされている	40.2	44.1	35.1	39.1	18.2	**
自分の気持ちをうまく伝えられる	39.1	42.3	32.5	42.6	25.0	*

識－特に自己肯定感－が高いということが言えよう。また、自己認識面においては対人関係の様態とは逆に第Ⅲ象限のほうが第Ⅱ象限よりも高い数値を示す傾向にある。これは、両親からの理解がない分、いつも自分自身で自己認識を行い、自己肯定を行うことで他者から理解されたいという欲求を補っているからではないだろうか。

以上、人間関係の基礎である「家族」に注目して家族環境を類型化し、子どもの対人関係の様態や自己認識の様子について分析を行ってきたが、家族環境の安定している子どもほど対人関係も安定し、対人ネットワークは広範であって、自己認識も高いことがわかった。また、家族環境を構成する要因のなかで、子どもにより影響を及ぼすのは、「両親の仲」（家族内の雰囲気）よりも「両親による子どもへの理解」であるという結果も明らかになった。

5. 考　察

先述したように、「平素」「困難」「心の支え」といったさまざまな日常生活場面で、子どもはその状況に応じた他者選択を行っており、重層的な対人関係を使い分けている。また、家族環境の安定している子どもほど、対人関係が安定し、対人ネットワークも広範である。このように、まだ人間発達の課程にあって未熟で失敗しやすい対人関係を持つ子ども期には、居場所が複数あることが望ましいのだが、第Ⅳ象限の子どものように人間関係の基礎であるはずの「家族」のなかに居場所を見つけられない子どもは別の集団に移ろうとしても、その場所での対人関係も消極的なものになってしまう。そこでまた不安や不満を抱えてしまい自分の居場所とすることができず、小さなことで問題や躓きが生じてしまう。

このようなことから考えても、準拠集団が移行する前までにせめて「家族」の中に自分の居場所を見出すということが、その先の「仲間集団」や「社会集団」に移行していくうえで基礎的な要件であるといえる。そのためには、まず両親が子どものことを理解してあげることで、子どもが自己承認（理解）を確信できるようにすることが最重要である。その上で両親が仲良くすることで家族内の雰囲気を良いものにして、家族環境を安定させることが大事であろう。

＜注＞

1）総務庁青少年対策本部『非行原因に関する総合的研究調査（第３回）』（平成11年３月）30、32頁。青少年の発達環境研究会『青少年の規範学習と逸脱統制に関する研究』（平成13年３月）42頁など参照。

2）本論文においては、家族環境のなかでも特に両親との関係について注目して考察を行ったために、片親や両親とも不在という子どもについての考察は行っておらず、両親の揃っている子どもにのみ限定して考察を行った。この点においては、片親や両親とも不在の子どもについても様々な特質を見ることができるのではないだろうか。今後の研究課題として考える必要があると思われる。

3）今回の分析した事柄について、性別による差は確認されなかった。

4）子どもが日常生活で話す相手として「父親、母親、きょうだい、祖父母、友人、先生、近隣の人」を質問紙にあげており、その誰とも話したくない場合は「いない」、全員と話したい場合は「全て」として、「楽しい」「悲しい」といった各設定場面における選択パターン数をカウントし、それをネットワークの規模とした。

5）一般的には農村の方が家族間の関係が良好で都市部や工業地域に比べて家族環境が良いように思われているが、本調査においては、「工業地域」＞「都市部」＞「農村」の順に家

族環境が整っているという結果になった。

6）調査票において「いない」の項目を作っていなかったため、「その他」のなかに多く含まれている。

7）自己否定感につながる質問も行ったが、検定の結果、有意差は確認されなかった。

※本稿で用いたデータは、平成14年度科学研究費補助金・若手研究(B)（「家族崩壊と子どもの社会化過程に関する研究」代表者：田中理絵）の一部に基づく。